

書評 乾裕幸著 『俳句の本質』

著者	加藤 定彦
雑誌名	國文學
巻	85
ページ	70-73
発行年	2002-12-17
URL	http://hdl.handle.net/10112/5077

(書評) 乾裕幸著 『俳句の本質』

加藤 定彦

遙かな先達に「さん」付けをする失礼をお許しただきたい。

乾さんが亡くなられる三、四ヶ月前、余命わずかなので、生きて
いる内に「偲び草」として文集を出したいから、自分(乾さん)の
学問について何か短い文章を書くように、とのお電話をいただいた。
その間、三十分程、深刻な話の内容にどんな相槌を打つたらよいも
のか、ほとほと窮したが、一も二もなくお引き受けしたことはいう
までもない。

指定の枚数はごく僅かなので、小文では、私が研究者として出発
した頃、乾さんが西鶴や宗因についての論考を矢継ぎ早に発表され、
仲間とともに舌を巻いたこと、白石梯三さんとの名コンビで『連句
への招待』を著し、お二人の両吟連句も掲載、それを機に両吟をつ
づけ、実作と研究とが表裏をなす俳諧研究のあるべき姿を身を以て
示されたこと、芭蕉祭文部大臣奨励賞を受賞された『ことばの内な
る芭蕉』の中で、俳諧における言葉の問題に真っ正面から取り組み、

詩言語(歌語)と日常言語(俳言)の相克や表現世界のもつ両義性
などを意欲的に論じられたが、学界もそうした根源的な問題と向き
合うべき時機にきているのではないか、などと述べた。

そうして寄せられた十名の文章に、乾さんの年譜・業績目録、安
代夫人とご本人の文章を付した小冊子が『祝祭の日々―死を控えて
―』である。二年前の九月、計報と前後して手もとに届いたその小
冊子を拝読し、あらためて人間味溢れる乾さんのひととなりを知る
とともに肅然とした。

手許を照す明りの傘に、嬰珞に飾られたる天蓋を思ひ、やが
てまたしだれ桜に想ひを致す。夕暮、その下に聖霊たちの寄り
集ひ来たる。わたくしはその明りにやさしく包まれて原稿用紙
に文字を埋める。論文であれ創作であれ、それらは活計から解
き放たれた、いつときの祝祭にはかならない(跋文「さような
ら」より)。

学問ができることを無上の至福とするこの姿勢は、「活計」に拘束されつづけた者にしか分らない。学問を誰かのためとか、業績として捉える私たち世代の発想からは遠く、純粹で、美しい。

この姿勢は、乾さんの愛する伊東静雄の詩の一節「夕毎にやつと活計からのがれて／この窓べに文字をつづる／ねがはくはこのわが行ひも／あゝせめてあのやうな小さい祝祭であれよ」(『反響』所収詩より)に由来するという。この一篇を跋文に引用した後、「わたしもまた、この幼き者たちの野遊びと同じように、余生の営為の悉くをささやかな祝祭たらしめたいと真剣に祈る」と述べ、最期の筆を擱いている。お電話などで、残された時間が論文二編の執筆に注がれ、別に短めの文章一編とともに雑誌に掲載される段取りになつてゐること、執筆の間は、思考力を鈍化させないよう、痛みを和らげる措置をとらなかつたことも伺つた。壮絶な「祝祭」ではある。

かくして最後の力を振り絞つて彫琢された遺稿論文を中心に、故人の意向に沿いつつ編集・刊行し、三回忌の手向けとしたのが『俳句の本質』である。今回、ご指名により書評の大役を仰せつかったのであるが、すでに俳文学界の泰斗尾形佑先生の序が備わつていて、浅学非才が的はずれな妄言を述べ立てるまでもないだろう。

先生は、あらためて乾さんの諸論考に目を通されて、堅牢・精緻

な考証と資料の博搜、文学研究の基本である執拗な作品の注釈(読み込み)、文学の本質面への問題意識、など先師萩野清譲りの学风であることはもちろん、西欧の哲学や言語学・詩学も吸収、強靱な論理・思考力により俳諧の「ことば」について鋭利な洞察を加へてゐること、それらはみことなバランスを保ち、かつ視野も特定のジャンルや時代の枠に囚われず、実作体験に裏付けられた研究成果が学問の域にとどまらず、「現代俳句の創造」に寄与するもので、「櫻題を、あえて『俳句の本質』と定めた理由も、そうした氏の学問姿勢に発している」と乾さんの真骨頂を説いて余すところがない。

以下に、後進の気ままな贅言を二、三述べさせていただき、書評の責めを塞ぐことにしたい。

前半に西山宗因と俳諧師西鶴関係の論考・注釈が九篇取められている。好悪でいえば、私は西山宗因が好きであり、天才詩人と考へているが、乾さんは何といつても西鶴ファンである。すでに名著『俳諧師西鶴』をはじめ、幾冊か、関係の研究書を刊行されているにもかかわらず、最期まで西鶴を語つて飽きることがない。

まず「二万翁の誇り」の章。大矢数を興行するに当たり「神力誠を以(て)息の根留る大矢数」と巻頭発句を詠み、大矢数の争いに終止符を打つた西鶴は、同時に「射てみたが何の根もない大矢数」の句も詠んだ(『花見車』)。野間光辰先生はこの句の解釈として、

①大矢数後の余裕綽々ぶり、②記録達成後の空虚感、との二説を示された。乾さんは、「西鶴という男は、空しさを感じるような性質の人物ではなかった」「ふてぶてしいほど強靱な神経の持主で」「誇りをもって、『二万翁』を名乗ったのである」、との西鶴観を披瀝されている。難波っ子のバイタリティーを見たのであろう。

「俳諧師西鶴」の章では、浮世草子に転じたとしても、「付合いき」の文体となっているし、談林風の本歌・本説取りを修辞技法として多用している、と西鶴文学に占める俳諧のウェートの大きさを指摘し、さらに辞世吟に「難波俳林松寿軒西鶴」と署名している事実から、自身を「浮世草子作家」としてではなく、「俳諧師」として意識していたことを強調、へ俳諧師西鶴へ賛歌のとどめを刺す。

遺稿論文の一つ「古俳諧と狂歌」序説の章は、いままで誰も組上に乗せなかった初期俳諧と狂歌との関係を論じる。「談林俳諧史」(無心所著)の系譜において「の章の姉妹篇ともいうべき、狂歌と談林俳諧の風体(無心所着体)の共通性と機能・意識の相違に着目し、貞門俳人は風体が異なり、堂上の権威に繋がる狂歌を必要とし、談林俳人は風体を同じくする狂歌を必要とせず、堂上の権威に惹かれることもなかった、と説く。ジャンルを横断する卓論で、心身ともに追い詰められた極限状態での執筆とは到底思えない。

「へ連句は曲解の文学」説批判」の章も、遺稿論文の一つ。時枝

誠記の『国語学原論統篇』(昭和三十年)における連句論に対する批判で、言語の多義性・曖昧性を無視し、作者の意図から離れて普遍化した文学言語に、話し言葉同様の「曲解という伝達の形態を押しつけることは、(中略)不可能ではないか」と疑問を投げかける。連句実作の経験を踏まえながら、かつて一世を風靡した時枝理論に放った痛烈な一撃であろう。

「滑稽―古典俳句の機構―」の章は、初期俳諧から芭蕉俳諧への展開を考える上で架け橋の役割をなすもの。

次章「芭蕉と滑稽―俳句の詩性―」では、天和期の漢詩文調や貞享期の連歌調を滑稽(伝統詩歌のもどき)の観点から考察する。蕉風の「取合せ」の句も、融合をはかりつつ雅俗をともし詠み込んだもので、初期俳諧の雅俗の不調和による滑稽が蕉風では詩的な「おかしみ」に昇華したと見ることが出来る。乾さんは、『奥義抄』の「俳諧」定義を援用し、詩や和歌が「王道」による表現であるのに対し、俳諧は「非道」により「妙義」を述べるものだとし、芭蕉はもちろん、現代俳句も「その詩性はおかしみを本質とするものである」と断言する。大胆かつ説得力に富む提言といえよう。

後半は現代俳句や実作者を視野に入れて論じた芭蕉論や俳諧・俳句論で、「俳句解体新書」の章では、俳諧を戯笑性・対話性・謎性の三要素から捉え、前期俳諧や初期俳諧だけでなく、芭蕉や現代俳

句についても謎性の視点から論じている。

坪内稔典氏、堀信夫氏、桜井武次郎氏との対談や罪談は、今日の学界状況や俳壇状況を見渡しつつ多角的に論じ、俳句界に発言したアクチュアルな内容。「俳句は基本的に愉しくなくては……」とか「管理社会の中での自己解放」（「罪談 俳句の特性」）との見出しに顕著なように、乾さんはほんとうに俳句を愛していたんだナア、と思う。

「俳句の《私》」の章の、「私小説ふうの息苦しい俳句は、もうそろそろごめん蒙りたい」という一語は、子規以来のお題目「客観写生」に囚われがちな実作者にとって耳の痛い苦言といわねばならない。乾さんには、「嘘つきの時計と暮らす春深き」（『風葬の口笛』）という佳句がある。へ退屈な事実よりも愉しい嘘を」というのが、サービスピ精神を専らとする関西人のこころいきであり、西鶴ファンである乾さんの生き方でもあった。

なお、本書『俳句の本質』と前後して『古典俳句鑑賞』（富士見書房）も刊行された。俳句雑誌に連載された平易で含蓄のある鑑賞の手引きなので、学生諸君や俳句愛好者・実作者には併せてお読みいただきたい。（平成十四年九月 関西大学出版部 四六判 四五頁 四二〇〇円＋税）

（かとう さだひこ 立教大学教授）